

島崎藤村『破戒』のお志保

OSHIHO in SHIMAZAKI Toson's HAKAI

はじめに

『破戒』は一九〇六年三月二十五日に「緑蔭叢書第壹篇」として自費出版された、島崎藤村による小説である。実に一七七年前の作品だが、今なお多くの人に読み継がれている、不朽の名作である。

『破戒』には既に夥しい数の先行研究があるが、本作の魅力を構成や登場人物の面から深堀する試みはあまり行われてこなかった。簡単にまとめてしまうと、『破戒』には「社会小説」と「告白小説」の二つの立場がある⁽¹⁾というのが、これまでの研究史の最大の争点であった。

しかし、このような二者択一的な読みで、『破戒』本来の魅力を把握しきれぬのだろうか。

本作を告白小説と捉える場合、論の中心となるのは丑松の心理的葛藤や告白の場面である。丑松を中心に論じると、その他の登場人物は丑松の物語の完全な脇役となってしまう。一方、社会小説として捉える場合、作者藤村の差別意識や作中に現れる部落差別に対する誤った認識⁽²⁾などを指摘する必要性が生じてくる。重要な指摘ではあるが、そればかりを指摘していても、物語そのものを論じること

にならない。

告白か、社会か、という議論は作品を論じるうえで確かに重要なテーマではあったが、そればかりに固執しては作品の良さを見逃す、非常に狭い読みになってしまう。現に、これらの読みはむやみに丑松の土下座やテキサス行きを批判する行為に繋がり、それらを物語構成上の破綻とする見方がまかり通ってしまうなど、本作の展開そのものを批判する論が数多く存在する原因となった。

そんな「破戒」という作品を、令和という時代に読み直したい。作品そのものを純粹に楽しみ、ありのままに論じる姿勢が今こそ求められていると考えるからだ。

本稿では、『破戒』をありのままに鑑賞するために、お志保に着目する読みを提案する。お志保に注目しながら本作を精読することで、令和の時代に『破戒』を読むことの意味や、新しい『破戒』の読みについて考えていきたい。

なお、本稿では『藤村全集 第二巻』（筑摩書房、一九七三年）を底本とする。

石 策 智 子

ISHIZUKA Tomoko

第一章 『破戒』の中のお志保

第一節 お志保の人物像

『破戒』初版本には錦木清方による挿絵が二つ添付されており、そのうちの一つがお志保の姿を描いたものである。この挿絵について中島国彦氏は「この図柄は藤村の意向であったはず」と述べており、作者の中でもお志保が重要な存在だと認識されていたと言えるだろう。にもかかわらず、お志保は長らく『破戒』研究の重要な存在としては認知されてこなかった。

では、本稿が着目するお志保とは、どのような人物なのだろうか。

お志保は丑松より年下の女性である。丑松が引越してきた蓮華寺に住んでおり、丑松と関わるようになる。お志保の父親は、丑松の教員仲間の敬之進である。敬之進一家は貧しかったため、お志保を若いうちに蓮華寺にやった。お志保は酒に溺れる父敬之進をかなり気にかけている。お志保には省吾という弟がおり、省吾は丑松が担任をしている学級の生徒である。お志保は七人兄弟だが、お志保と省吾だけが前妻の子であり、他の兄弟は現在の細君の子である。

また、物語が進むにつれて、お志保は蓮華寺の住職に関係を迫られてしまったこと、それをきっかけに蓮華寺を出て実家に戻ったこと、その時には実家は破綻し継母も兄弟も家出しており、敬之進は助かる見込みのない病に臥せてしまったことなどが語られる。

お志保の情報は人づてに語られることが多く、本人が登場する場面でも語りで情報が補われるなど、お志保自身が自分について語る描写は少ない。見た目や性格に関する情報は、主に丑松や敬之進の発言によって読者に語られる。読者はお志保に関する情報を常に何

者かの視点を介して得ている。読者がお志保を直接見る機会、物語の最後まで待たなければならない。

第二節 お志保に関する同時代評

第二節ではお志保という人物が明治の人々にどのように受け入れられてきたか見ていきたい。引用元は『藤村全集別巻（分冊・上）』（筑摩書房、一九七四年）である。

同時代評において、お志保に対する見方は否定的なものが多かった。例えば、大塚楠緒子はこのように述べている。

それにお志保の性格がはつきり爲ぬ様に思ひます
(中略)

最少しお志保の気性が判然と書かれてゐなければ、たかゞ小学校を卒業して蓮華寺で平凡に育てられた田舎娘が、いきなり懺悔録を貸して呉れといふのが、読んで解るかしらと思はれて合点が往かぬやうに思はれます、お志保は不幸な境遇に靡かれて年輩よりもおとなびて、多少の人生観も持つやうになつて、非常に丑松に同情を寄せてゐるといふことが今少しはつきりと書かれたい

また、中島孤島もこのように述べている。

此の美しい女性の力を何故もつと使はなかつたらう、単に結末の添物にしたのは憚らぬやうに思ふ。

またこの他にも、小川未明「お志保の性格は不充分で、あれでは物足りん心地がする」、正宗白鳥「お志保との恋は少し呆気なく色取りに付け加はへたに過ぎぬ」などの評がある。

確かに作中で恋愛の要素は薄く、お志保の気持ちは分かりづらい。お志保が自らの言葉で話し出す場面は物語の最終盤であり、その様子は唐突でそれまでとかなり異なっていると指摘する意見や、そのようなお志保の性格を前半でも出してほしいという意見も出ている。一方で肯定的な意見もある。与謝野晶子は「此処の『はあ』の一言が、能く利いて、お志保の性格を遺憾なく現はして居ると存じます」と述べ、お志保の描き方を絶賛している。

第三節 お志保に関する先行論

第三節ではお志保に関する先行研究を確認することで、これまでのような視点でお志保が語られてきたのか見ていきたい。ちなみにお志保に関する先行研究は非常に少なく、数えるほどもないのが実情である。今回は二つの研究を見ていく。

①中島国彦「島崎藤村「破戒」のお志保」(注4)に同じ

まずは中島氏の研究を確認する。中島氏は「藤村の姉園子とその夫の実生活が「破戒」の蓮華寺住職のお志保への行為に投影され、それも浄書の段階で書き加えられた可能性が強い」ことから、お志保を軸に「破戒」を読む重要性を指摘している。中島氏によれば、丑松とお志保には類似性があり、これは「二人の気持ちの触れ合いを生み出す」という点だけでなく、「お志保の最後の決心(丑松へ

の愛の告白)を生み出す伏線としての意味」があるという。そして、お志保の丑松への愛は「作者藤村によって精一杯の設定として形成されたもの」や「作者藤村が最後にとっておいた切り札」であり、「お志保の設定においても、見事に自分の創造したドラマを最後まで演出し通した」と主張している。中島氏は次のように述べて論を締めくくっている。なお、波線は稿者による(以下同じ)。

確かに「破戒」におけるお志保の描き方には、若干疑問点が残ろう。が、そうした瑕瑾を越えてお志保が読者に忘れられない人物となったのは、作者のこの作品への思い入れ、作品のラストシーン(二十三の四)で丑松の頬に「熱い涙」を落とさせたものの、さらにいえばそれを通して形成された祈念としての人間像というあり方が存在していたからではなかったか。

「作者のこの作品への思い入れ」というのは、藤村が「破戒」に並々ならぬ思いをかけて作成したことを指しているだろう。そのような思いの込められた作品のラストシーンで「丑松の頬に「熱い涙」を落とさせたもの」は紛れもなくお志保の存在である。この事実はお志保の重要性を示している。加えてお志保には藤村の祈念、祈りのような気持ちが込められたキャラクターであるというのが中島氏独自の考えである。

つまり、藤村はお志保という存在に希望を託していたと考えられる。それは自らの素性を打ち明けてもなお、自分を支持してくれる人がいるという希望である。お志保は作者の祈念が込められた存在であり、重要な役割を果たしていると考えられる。

しかし、この読みには疑問も残る。それはお志保の丑松への愛が藤村の精一杯の設定だとする部分である。

過去の研究において、『破戒』はドストエフスキの『罪と罰』の影響を大きく受けた作品であることが指摘されている。『罪と罰』の影響を考えるならば、お志保の丑松への愛は作者藤村の精一杯の設定ではなく、『罪と罰』での主人公ラスコーリニコフとソーニヤの設定を受け継いだだけとも考えられる。もしそうであった場合、作者の大きな祈念もお志保には存在しないということになってしまふ。お志保について考えるにあたっては、『罪と罰』の影響も考える必要があるだろう。

そこでお志保に関する先行論の二つ目として、『罪と罰』との比較研究を見ていきたい。

②吉田孝子「破戒」「罪と罰」の比較文学的研究」(『国文研究』三、一九五七年一月、熊本女子大学国文研究部)

『破戒』と『罪と罰』との関わりを精密に述べた代表論である。吉田氏は、構想、主題、主要人物の配置、性格、境遇、描写などにおいて『破戒』は『罪と罰』と多数類似しており、両作品の関係は非常に密接であると結論付ける。吉田氏はお志保に対応する人物がソーニヤであるとし、次のように述べている。

お志保とソーニヤ。お志保は敬之進の先妻の子であり、ソーニヤもマルメラードフの先妻の子である。両者は一家を救助する為に、お志保は蓮華寺の養女となり、ソーニヤは娼婦となつ

て働いている。二人共教養高き女性ではないが、確乎たる信念と深い愛情をもつて容易にその意志は動かない。しかも彼女達は、進んでより不遇な丑松、ラスコーリニコフに純清な愛を捧げ、生涯を共に歩く決意をする。両者の犠牲的精神、性格、環境は著しく共通している。

吉田氏の主張から、『破戒』の主要人物は『罪と罰』の影響を受けて描写されており、お志保はソーニヤと類似した存在であると考えていいだろう。

しかし、このように考えると一点疑問が残る。それは『破戒』のもう一人の主人公と言つていいほどの影響力を持つ猪子蓮太郎に対応する人物が、『罪と罰』に存在しないことである。『罪と罰』から著しく影響を受けて書かれた作品が『破戒』だと結論付けるならば、なぜ蓮太郎に対応する人物が『罪と罰』に存在しないのか。

『罪と罰』では、主人公ラスコーリニコフが自分の罪を告白するきっかけを作るのはソーニヤである。『破戒』で丑松が自分の素性を告白するきっかけとなったのは蓮太郎である。ソーニヤと蓮太郎は物語で果たす役割が共通している。『罪と罰』において、ラスコーリニコフが罪を告白するきっかけを作る、という役割をソーニヤから奪つてしまうと、彼女は影の薄い人物になってしまうだろう。『破戒』のお志保はその役割を蓮太郎に託しているので、蓮太郎と比べると物語上で果たす役割が弱い存在に感じてしまう。このことが第二節の同時代評でも指摘されていた、お志保のキャラクター性の薄さにもつながっているかもしれない。

ではなぜ作者は、お志保という存在を取って残したのだろうか。

ここに、『破戒』のお志保が持つ本当の役割が隠れていると稿者は考える。

存在が薄くなることを恐れずに藤村が『破戒』にお志保という人物を残したと考えるならば、そこに『破戒』でしか読み取れないオリジナルなお志保の姿が現れてくるのではないか。第二章では、お志保が『破戒』で果たしている役割について詳しく読み解いていきたい。

第二章 お志保が果たす役割

第一節 丑松とお志保の関わり

第三章では、『破戒』でお志保がどのような役割を果たしているのか考えていきたい。そのために第一節では、丑松とお志保の関わりについて考えていきたい。なお、引用に付した○内の数字は底本（『藤村全集 第二巻』（筑摩書房、一九七三年））のページ数である。

丑松の目にお志保はどのように映っているのだろうか。丑松とお志保の関わりがよく分かるのは、第六章（四）である。

丑松とお志保は自分の父や母のことを話し、お互いが「親に縁の薄い方の人間」であることを確認し合う。丑松の「私などは、ですから、親に縁の薄い方の人間なんぞでせう。と言へば、まあお志保さん、貴方だつても其御仲間ぢや有ませんか（八〇）」という言葉にお志保は涙する。地の文ではその様子が「親に縁の薄いとは、丁度お志保の身の上でもある。お志保は自分の家の零落を思出したといふ風で、すこし顔を紅くして、黙つて首を垂れて了つた（八一）」と語られる。お志保の涙には、丑松という心が通じ合える人を見つ

けたことに対する感涙も含まれているだろう。丑松の方は「快活な、自然な信州北部の女の美質と特色とは、矢張丑松のやうな信州北部の男子の眼に一番よく映るのである（八一）」と、お志保に惹かれている様子が分かる。

丑松にとってお志保はただの魅力的な若い女性ではなく、憐れみを抱いている敬之進の娘であり、「親に縁の薄い」という共通点を持った存在である。恋愛感情もあるが、それ以上にお志保はより理解者として丑松の前に存在している。

丑松の感情は、お志保がその場にいなくても薄れることはない。その様子が顕著に表れるのは第九章（一）である。

父を亡くし故郷に帰っていた丑松は、会葬の礼のために幼馴染が嫁いでいる家を訪ねる。幼馴染の女性の名前はお妻といい、丑松が九歳になる頃によく遊んだ初恋の相手である。そんなお妻も今では立派な母親となっており、丑松の記憶の中の愛らしい少女ではない。そして、このような描写が続く。

斯ういふ追懐の情は、とは言へ、深く丑松の心を傷けた。平素もう疑惧の念を抱いて苦痛の為に刺激き廻されて居る自分の今に思ひ比べると、あの少年の昔の楽しかつたことは。噫、何にも自分のことを知らないで、愛らしい少女と一緒に林檎畠を彷徨つたやうな、楽しい時代は往つて了つた。もう一度丑松は左様いふ時代の心地に帰りたと思った。もう一度丑松は自分が穢多であるといふことを忘れて見たいと思った。もう一度丑松は彼の少年の昔と同じやうに、自由に、現世の歡樂の香を嗅いで見たいと思った。斯う考へると、切ない慾望は胸を衝いて

春の潮のやうに湧き上る。穢多としての悲しい絶望、愛といふ楽しい思想、そんなこんなが一緒に交つて、若い生命を一層美しくして見せた。終には、あの蓮華寺のお志保のことまでも思ひやつた。(一一二)

楽しかった少年の記憶を思い出せば出すほど、今の自分の苦痛にかき乱される。あの時代にはもう戻れない。それは自身が穢多であることを自覚してしまつたからだ。楽しい記憶さえも自分を傷つける刃となつてしまふ、丑松の苦しい状況が表されている。

「穢多としての悲しい絶望」の対になるものは「愛といふ楽しい思想」である。自分の素性を自覚すればするほど、愛からは遠ざかり絶望が襲う。恋愛の楽しい記憶を辿れば辿るほど、自分の素性に対する自覚は強くなつていく。丑松の自分の素性に対する絶望は、「愛といふ楽しい思想」の裏側にあるものなのだ。決して、小学校教員である自分の地位などが対応しているわけではない。お志保の存在は今の自分と対極の位置にあり、自分の素性に対する苦しみの原因とも言える。「穢多としての悲しい絶望」の淵にいる丑松と、「愛といふ楽しい思想」を感じさせてくれるお志保は対の関係になつてゐることが、幼馴染のお妻との場面から明らかになつてゐるのである。

丑松が自分の素性と愛との間で葛藤する場面は第十一章(四)にも詳しく描かれている。省吾からの手紙に「姉よりも宜敷」と書いてあつたことを受け、丑松はより苦しむ。

あゝ、穢多の悲嘆といふことさへ無くば、是程深く人懐かしい

思も起らなかつたであらう。是程深く若い生命を惜むといふ氣にも成らなかつたであらう。是程深く人の世の歓楽を慕ひあこがれて、多くの青年が感ずることを二倍にも三倍にもして感ずるやうな、其様な切なさには知らなかつたであらう。あやしい運命に妨げられ、ば妨げられる程、余計に丑松の胸は溢れるやうに感ぜられた。左様だ——あのお妻は自分の素性を知らなかつたからこそ、昔一緒にこの林檎畠を彷徨つて、蜜のやうな言葉を取交ししたのである。誰が卑賤しい穢多の子と知つて、其朱唇で笑つて見せるものが有らう。もしも自分のことが世に知れたら——斯ういふことは考へて見たばかりでも、実に悲しい腹立たしい。懐しさは苦しさに交つて、丑松の心を搔乱すやうにした。(一四三)

丑松が自分の素性をこれほどまでに悲しむのは何故か。煩悶の理由は、普通の青年のように恋愛を楽しむことができないこと、それが故にもつとお志保を恋しく思つてしまふことである。丑松の悩み、葛藤の原因は「愛といふ楽しい思想」であり、お志保である。『罪と罰』のソーニヤがラスコーリニコフの自白を促す役割を与えられていたとするならば、『破戒』のお志保は丑松の葛藤や苦悩をより深くする存在になるだろう。ここに、蓮太郎には果たし得なかつたお志保の眞の役割があり、その視点で読めば「穢多としての悲しい絶望」が「愛といふ楽しい思想」と対になつて描かれていることを読み取ることができる。

そして、このように現在の丑松と対極の位置にいるお志保に、丑松はどうして易々と近づくことができないか。同時代評ではお志保

と丑松との恋愛の描写が薄く物足りない」と評されていたが、深く入り込んで書くことができない理由があるのだ。丑松はお志保を愛しているが、その思いを意識すればするほど、自分自身のことを強く自覚し苦しんでしまう。これが、第十九章(三)で銀之助にお志保のことを聞かれた時に「其人は最早死んで了つたんだよ(二四五)」という丑松の発言に繋がる。そう思うことでしか保たれない自我があるのだ。二人の恋愛描写は薄く物足りないのではなく、描かないことで丑松の葛藤が表現されていると言えよう。

第二節 お志保の必要性

お志保に与えられた役割は第一節で述べたものだけではない。物語の最後でお志保はもう一つ重要な役割を果たしていると考える。それは「勝野文平の敗北」を決定づけるということだ。

『破戒』には勝野文平という男が登場する。この人物は郡視学の甥であり、校内での位置は首座の丑松、師範出の銀之助に続く第三席である。校長との距離がとても近く、出世願望も強い。文平は蓮華寺によく出入りしており、お志保に好意を寄せている。丑松は「あ、あ、素性が素性なら、誰が彼様な男なぞの身の上を羨まう(一八〇)」と述べており、文平をよく思っていないものの、文平のように快活に接することができない自分と照らし合わせ、悔しい気持ちを抱く。文平はいち早く丑松が部落出身であるという情報を手に入れ、校長に耳打ちする。校長だけでなく、蓮華寺の住職の奥さんやお志保にも伝えていたようで、自分の出世のために他人を陥れるような性格も垣間見える。

第二十一章では丑松がいよいよ自分の素性を社会に告白する様子

が描かれる。その丑松の様子と並行して描かれるのは校長や郡視学など丑松をよく思わない学校の勢力だ。丑松の告白の前に、どうにか丑松を排斥しようとする動きが進行していたことが分かる。丑松が告白した後は、丑松が受け持つ学級の子供たちが丑松を引き留めようと校長室まで直談判にくる。子供たちの願いは簡単に却下される。その様子を文平は「冷かに笑つて(二七七)」眺めているのである。

第二十一章はこの文平の冷笑で幕を閉じる。学校からは丑松がいなくなり、自己都合で銀之助もいなくなり、第三席であった文平は首座になるだろう。出世願望も叶い、ますます社会的地位を高めていくであろう文平の将来が窺える。物語がここで終わっていれば、排斥された丑松と出世する文平が描かれることになり、社会的には文平の成功という形で終わる。

しかし、それに待ったをかけるのがお志保の存在である。お志保は自分の家を訪ねてきた銀之助に対し、文平がよく蓮華寺を訪ねてきていたこと、文平によって丑松の素性を明かされていたことなどを伝える。そして、お志保は文平をこのように評す。

『それから、あの、』とお志保は考深い眼付をし乍ら、『瀬川さんのことなぞ、それは酷い悪口を仰いましたよ。其時私は始めて知りました。』

『あ、左様ですか、それで彼話(あはなし)を御聞きに成つたんですか。』と言つて銀之助は熱心にお志保の顔を眺めた。急に気を変へて、『ちよッ、彼男も余計なことを喋舌つて歩いたものだ。』

『私もまあ彼様な方だとは思ひませんでした。だつて、あんまり酷いことを仰るんですもの。その悪口が普通の悪口では無いんですもの——私はもう口惜しくて、口惜しくて。』

『して見ると、貴方も瀬川君を気の毒だと思つて下さるんですかなあ。』

『でも、左様ぢや御座ませんか——新平民だつて何だつて毅然した方が、彼様な口先ばかりの方よりは余程好いちや御座ませんか。』

何の気なしに斯ういふことを言出したが、聽てお志保は伏目勝に成つて、血肥りのした娘らしい手を眺めたのである。(二八二)

このお志保の発言によつて、文平は完全に丑松に敗北する。文平はお志保に好意があり、頻繁に蓮華寺を訪ね、お志保や住職の奥さんと親しく関わり、いずれはお志保を自分のものにしようと考えていたかもしれない。しかし文平が丑松を悪く言えば言うほど、お志保の気持ちは文平から離れていた。社会的には成功したように見える文平も、人柄の面で丑松には敵わないのである。これは小学校の教員という立場でも同じだ。丑松は生徒からの信頼が厚いために学内では首座にいた。社会的には出自で排斥されてしまうこともあるかもしれないが、人と人との関係において出自は関係なくその人自身の性格によつて決まるのだということが、お志保の存在によつて明らかになっている。これこそがお志保が持つ重要な役割の二つ目だと稿者は考える。作者は『破戒』において、苛烈な差別を描くと共に、人と人との関係においては出自など関係ないということをき

ちんと描いているのである。そしてそれはお志保の存在によつて裏付けされている。

また、丑松の今後についての希望を示す役割もお志保は担っている。『破戒』は全てを告白した丑松がテキサスで農業に従事することを決め、そのためにまず東京へ発つ場面が幕を閉じている。この丑松のテキサス行きは批判も多く、現実からの逃避であるとか、構成上の破綻であるとか、厳しい読みがなされてきた。本稿での姿勢としては、作品がこのように締めくくられている以上、その事実を否定することはしない。

かねてから指摘されるように、丑松が大日向とテキサスへ行ったところで、その事業が成功するかどうかは分からない。それは作者も理解しているように思える。

テキサス行きを提案された丑松は、「様子によつては頼んで見よう(二九〇)」と考えており、熱心な賛成の気持ちは感じられない。研究者は丑松のテキサス行きを否定するが、当の丑松もテキサス行きに諸手を挙げて賛成する様子はない。研究者が丑松のテキサス行きを案じるように、丑松もまた大日向とテキサスへ向かうことが不安であろう。そもそも、丑松が実際にテキサスに行ったのかどうかは分からない。分かるのはまず東京へ発った、ということである。丑松の行動は長年テキサスへの逃亡だと非難されてきたが、そもそも逃亡もしていない。まずはこの点を抑えておきたい。

藤村は丑松のテキサス行きを、丑松に完全な希望を与えるつもりでは書いていないだろう。もしテキサス行きだけが丑松の希望の光であれば、もっと明るく希望を持った選択であるかのように書くだ

ろうし、一緒にテキサスへ行こうとしている大日向のことを「田舎の漢方医者」などと表現しないはずだ。つまり、作者が用意した丑松の将来への希望は別にあると考える。それこそが、丑松とお志保の結婚ではなからうか。

銀之助の計らいによってお志保の気持ちを知った丑松は涙する。銀之助は丑松の為に学校にも蓮華寺にもお志保のもとへも行き、全てを取り計らう。そこで銀之助は蓮太郎の奥さん、未亡人にお志保のことを話す。すると未亡人はお志保の不幸な境遇に心を動かして、「行く／＼は東京へ引取って一緒に暮らしたい。丑松の身が極つた晩には自分の妹にして結婚せるやうにしたい（二九〇）」というのである。

読者が『破戒』の最後に感動できるのは、丑松の素性を知つてもなお丑松の見方として尽力する銀之助の姿や、丑松の出發を見送るために駆けつけてくる高等四年の生徒たち、そして丑松を思い続けるお志保の姿が描かれているからであろう。作者が本作を通して描きたかったのは、告白の後に海外に逃亡する丑松の姿ではない。告白に向かう青年の葛藤と、告白を受けても変わらない人々の姿である。その両方にお志保は深く関わっている。お志保に着目して本作を読み直すことで見えてくるのは、丑松の卑屈な姿ではなく、丑松を愛する人々の温かい心の内である。『破戒』が百年間受容されている理由は、ここにあるのではないか。確かに『破戒』に描かれた苛烈な差別描写や差別用語などは、今まで苦しい差別を受けてきた方々には到底受け入れられるものではなかっただろう。丑松は素性を恥ずべきもののように捉え、隠し、決死の覚悟で告白しても海外へ逃亡するような卑屈な人間のように映ってしまっただろう。しか

し、もし本当に『破戒』がそのようにしか読まれ得なかったならば、きつと百年間も受容されてこなかったはずだ。

『破戒』が示す結末は、差別を超えた人と人の繋がりである。令和の今となっても『破戒』が読み継がれているのは、丑松を受け入れる周囲の人間の温かさが、厳しい差別の現実を超える希望として描かれているからではないか。そして、その様子が現代でも色褪せることなく読者を魅了し続けているからではないだろうか。『破戒』が百年間受容されている理由を、稿者はここに読み取りたい。

おわりに

本稿では『破戒』が今となっても読み継がれている理由を明らかにすることを目的とし、そのために新しくお志保の視点から本作を読むことで、お志保が本作で担う重要な役割や、藤村が描いた希望などを明らかにした。最後に、『破戒』を読むという行為について、自身の考えを述べて論の結びとしたい。

部落解放・人権研究所が発行した『ヒューマンライツ』という雑誌が、二〇二二年にある特集を組んだ。タイトルは「現代の『破戒』―部落出身を語ること」。被差別部落にルーツをもち、学校教育の現場で働いている方々が、自分のルーツを伝えるということに対してどう感じているのか、思いが綴られた特集である。冒頭、編集部はこのように述べている。

全国水平社創立一〇〇年をむかえた今年、六〇年ぶりに小説『破戒』が映画化された。一世紀前の時代を生きていた主人公

の瀬川丑松が経験していること、葛藤は過去のことではない。一〇〇年が経過しても、家族にすらルーツを語れずにいる方たちが、さまざまな葛藤をかかえている現実がある。ルーツを語っていない部落出身者にとって部落差別は「日常」だが、自分が差別を受けたこと、部落差別の被害にあっていると伝えることができない。

『破戒』は百年以上前に描かれた物語であるが、描かれた内容は百年前のことではない。今も丑松のように苦しんでいる人がいる。私たちはその事実にとれだけ向き合うことができているだろうか。部落差別問題は最早過去のことになりつつある。現在では新たな差別問題、人種の問題や性的マイノリティーの問題などが発生し、部落差別についての問題はあまり聞かなくなった。それでも人々の関心は消えたわけではないし、差別が完全になくなったわけでもない。差別問題に向き合うというのは、どういうことだろうか。人を差別しないというのは、どういうことだろうか。『破戒』の丑松は自分の素性を受け入れてくれる周囲に恵まれ、希望を持った結末を迎えられた。しかし、職は失っており、現実の厳しさもまた描かれている。『破戒』を読んだ私たちは、どんな行動をとればいいのか。出を出を隠している人が周りにもいるかもしれないと、人を探るようなことがあってはならない。文平のように人の出を出を利用して自らを出世させるようなこともあってはならない。誰かが自分の言い難い出自を告白した時に、銀之助やお志保のように変わらずに接し、受け止める姿勢がきつと誰かの救いになるはずだ。それが丑松の希望になっていることも、『破戒』には描かれている。『破戒』

を読んでどう思うか、どう感じるかは人それぞれである。丑松の感情や行動に共感できないこともあるだろうし、遠い昔の異国の話に感じることもあるかもしれない。しかし、『破戒』を読んだことで身近な差別に気づき、興味や関心を持ち、差別問題解消のための一歩を踏み出すきっかけができれば、それこそが令和の時代に『破戒』が存在することの意義であろうと、私は考える。今後『破戒』を読んだ一人でも多くの人が、部落差別問題に関心を持つことを願い、本論を結ぶ。

(二〇二四年九月二七日受理)

注

(1) 八木良夫『破戒』をめぐって(『同志社国文学』一、一九六六年三月)では、「社会小説」と読む研究者として野間宏、「告白小説」と読む研究者として和田謹吾の名前が挙げられている。

また、どちらか一方に偏らない研究として、平野謙「明治文学評論史の一齣―『破戒』を繞る問題―」(『学芸』一九三八年十一月、平岡敏夫『破戒』私論(『東洋研究』一九七〇年六月)などが挙げられる。

(2) 吉田永宏が「報告『破戒』百年と部落問題」(『関西大学人権問題研究室紀要』五三、二〇〇六年十二月)にて、「差別用語の問題等で部落の人たちから激しい非難、抗議をされたであろう」と述べている。

(3) 『新潮日本文学アルバム四 島崎藤村』(新潮社、一九八四年)に破戒の挿絵が載っている。

(4) 中島国彦「島崎藤村『破戒』のお志保」(『國文學 解釈と教材の研究』二五・四、一九八〇年三月)

*引用文については、仮名遣いは原文通り、漢字は原則として現行の字体に従った。ルビは適宜取捨した。